犬の宮

♪ぽんぽこ　ぽんぽこ　ぽんぽこ　ぽんぽ
ぽんぽこ　ぽんぽこ　ぽんぽこ　ぽんぽ
言うな　語るな　聞かせるな
春　秋　彼岸の人年貢
はるばる遠く　甲斐のくに
三毛犬　四毛犬　知らせるな
ぽんぽこ　ぽんぽこ　ぽんぽこ　ぽんぽ
ぽんぽこ　ぽんぽこ　ぽんぽこ　ぽんぽ

「お坊さま、そいつあいったい何の歌です？」
「ん、あぁこの高安村に来る途中の山道でな
どこからか聞こえてきたのを
覚えてしまってな、つい
ん？　どうされた
そのような難しい顔をされて」
ここは高安村の庄屋様の家
旅のお坊様のお話を囲炉裏端で
聞いているときの話でございます

「いや
、じつは　何年前からでしょうね
　都から役人が訪れまして
　若い娘を人年貢として
差し出せというようになったのですよ」
「なに？　若い娘とな・・・」
「へぇ、あしの娘も昨年の春に
今ごろどうしているのやら・・・」
「ふうむ、それは妙な話しぞ
そもそも人年貢は
都の守りをする為のもの
若い娘ではつとまりようもないわい」
「・・・お坊さま・・・」
「うむ、これは何かあるな・・・
　よろしい　次の彼岸までに
わしが甲斐の国まで行って
　三毛犬と四毛犬とやらを探してこよう」

こうして坊さまは甲斐の国へと参りました
「あぁそれでしたら
八代郡にある宝性大神という
　お社で飼われている犬のことでしょう」
という、話をきいて
お坊様はさっそくお社へ行って
わけを話しました
すると連れてこられたのは
なんともたくましい
子牛のように大きな犬でした
「これは頼もしい、
それではお借りいたします
　ありがとうございます」
お礼を告げるとお坊様は
急いで出羽路へとむかいました

さぁい

よいよお彼岸の日になりました
「これはこれはお役人様・・・」
「さぁ、こたびも若い娘を
人年貢に差し出すのじゃ」
「ははぁ、まずはお上がりになって
おくつろぎを・・・」
やってきた役人を
庄屋様が接待しています
それを遠くから見つめる
お坊様と村の男
「ふうむやはりな・・・」
「やはりと申しますと・・・・」
「あの役人・・・思ったとおり
人外のもののようじゃ
　おおよそ変化の術に長けた
狐狸の類であろうが・・・
　ともかく、手はずどおりに・・・」
「かしこまりました」
言うと男は走っていきました

「ほう、これはどうしたことじゃ」
「へぇ、お役人様には
いつもお世話になってございますので
　ほんの心づくしでございます
　ささ、鈴沼から取れた
魚の煮しめでございます
　熱燗のお酒はいかがでございますか？」
「ほほ、こいつはたまらん
　おい、もっともってきてくれ」
庄屋様のご接待に、
役人は食うわ飲むわ
意地汚く手づかみで
がつがつむしゃむしゃ
お酒など、
つがれるのを待っておれません
とっくりからがぶがぶと
とても都のお役人とは思えない行儀の悪さ
そうして、いいだけ食べて飲むと
今度はごろりと横になり
ぐおー　ぐおーと
いびきをかいて眠りだしました

お役人
が眠ると、
ご接待していた人たちは
そぉ〜っと部屋から外へと出ました
そして、部屋の出入り口という出入り口に
板でふたをして、
簡単には開かないように
つっかえ棒をしました
さぁここで三毛犬と四毛犬の登場です
「しっかり頼むぞ！」
お坊様はそういって
犬たちの頭をひとなですると
最後まであけておいた引き戸から
犬たちを中へと送り込みました

ぎゃおおおおおおおおおおおおおおおおん
屋敷の中から何者かの
悲鳴が聞こえてきました！
そして、ドダン、バダン
まるで屋敷の壁を打ち破らんばかりに
大暴れする音が響いてきました
屋敷の周りには、
何かがあったときのため
手に手に竹やりを構えた男たちが
十重二十重に囲んでおりました
「いったい中で何が起きているんだろう」
一人が恐る恐る節穴から中をのぞこうと
屋敷へと近づいた
そのとき！

どっ

かあぁあぁぁぁあぁぁぁぁぁああぁっ！
なにものかが屋敷の壁をぶち破って
外へと飛び出しました
たいまつの明かりに照らされたソレは
血まみれになった熊のように大きな
たぬきの化け物でした
腕にはぐったりとした
三毛犬をぶら下げています
「ぶふぁふぁふぁ　馬鹿な奴らめ
　おとなしく人年貢を
差し出していれば良いものを
　正体がばれたからには
この村にいる人間を
　一人残らず食ろうてやるわ」
そういうと化けだぬきは
三毛犬を男たちにむかって放り投げました

うわあ
ぁあぁぁあぁ！」
突然あらわれた化けだぬきに
男たちは腰を抜かしてしまいました
そうして男のうちの何人かは
放り投げられた三毛犬にぶつかって
転んでしまいました
たぬきは男の落とした竹やりを持って
ゆっくりと
転んで動けない人に近づいていきます
「ぶふぁふぁふぁふぁ
　どいつから串刺しにしてやろうか！」
そういってたぬきが竹やりを高く掲げ
たそのときです

「わうわうわうわうわうわう！」
屋敷の中から弾丸のように
飛び出してきた四毛犬が
すきを見せたたぬきに
がぶーっ　と噛み付きました
「ぎゃー　いてててて」
たぬきは必死に振り払おうともがきます
この隙を見て
お坊様が走りより
三毛犬に手をかざしてお経を唱えます
「ナウマク　サンマンダ　ボダナン
　アビラウンケン　ソワカ！」
すると三毛犬はゆっくり目を開き
再び立ち上がりました

復活した三毛犬がタヌキののど元に
ガブッ！　ガブリッ！
と噛み付きます
タヌキも負けてはいられない
両方の腕で犬たちを締め上げる
「ぐろるるるるるるるる・・・」
「ギギギギギギギギ・・・・」
「ぐろるるるるるるるる・・・」
「ギギギギギギギギ・・・・」
両者一歩も引きません　しかし
「ぐぼぁっ」
大変です、四毛犬のほうが
血を吐いて
ぐったりとしてしまいました
「がんばれ三毛犬！　がんばれ！」

こうなると村の人たちも
黙って見てはいれません
「これでもくらえ！」
「娘のかたきだ！」
ドスッ！　ドドスッ！
身動きのできない狸に
何本も竹でできた槍が突き立ちました
そして

ぐぼわあぁぁあぁぁぁあああぁぁぁぁっ！」
ついに　三毛犬は
たぬきののど笛を食いちぎったのです
がっくりとひざを突くタヌキ
のどからは真っ赤な血が
噴水のように噴出しています
「ぶ・・・ふぁふぁふぁふぁふぁふぁ・・・
　これで勝ったと思うなよ
　この血にかけて、
再びこの村へとよみがえって
復讐してやる
しかしそのときまで
貴様らが生きていられるかな・・・
ぐぶっ」
そう言い残すと
タヌキはピクリとも動かなくなりました

「そうだ犬たちは？
犬たちはどうなった！」
「あ、あそこに！」
村人が指差した先には
すでに事切れた四毛犬が
横たわっておりました
そして三毛犬がそのそばに
よろよろと歩み寄ると
寄り添うように横たわり
ついには動かなくなってしまいました
お坊様は二匹に近づいてかがみましたが・・・
黙って首を横にふりました
「この犬たちがいなかったら・・・」
「この村は・・・
化け物の餌食になっていただろうな・・・」
「お坊様・・・」
「ん、そうだな、
この二匹を
丁重に弔うことにしよう
　皆もこの日のことを忘れぬよう
　しっかりと語り継いでいくのだ」

こうして　この高安村には
村人たちが二匹の犬に感謝をし、
この出来事を忘れぬように
犬の宮が建てられました
そして二匹の犬たちをかたどった石の像が
今日もこの高安を見守っているのでした

どうびんと

解説

お話の舞台となった時代が和銅年間といいますから、
奈良時代、平城京遷都や古事記、
国産の貨幣の和同開珎ができたころのお話です。
このころ東北６県を合わせて陸奥の国と呼んでおりましたが、
山形秋田の２県のエリアを出羽の国として分割しました。
このとき舞台の高安村は、出羽の国へと編入されましたが
役人のミスでしばらく陸奥の国と勘違いされていたといいます。
そのためその間無税でありましたが、
取りっぱぐれた税を取り立てるため役人は急遽重税を課しました。
このころの税制は口分田を与えて租庸調をとるというものでしたが
この中の「庸」つまり労役や兵役が最も重い税といわれていました。
このような背景から怒った村の人間がこのような話を作って
憂さを晴らしたのではないかと思われます。

なお、原作ではタヌキは家から飛び出したりはせずに
家の中で二匹の犬と戦って相打ちになっています。
密室で決着がついたのでは紙芝居的につまらないという理由と
動物だけでなく人間も協力して悪者を倒すという
カタルシスを与えたいためにこのような演出をしました。

なお、この犬の宮
毎年７月の第４土曜日に町の観光協会が主催して
ペット供養際というイベントを行っております。
詳しくは
高畠町観光協会
://takahata.info/
電話:0238-57-3844
までお尋ねください。